居る。砂と溶岩との相違こそあれ、在りし町の埋没し了つたことに於ては、ヴェスビオ山下のポンペイと同様である。この埋没の狀態に關しては色々の傳說、多くは宗教的の色彩を帶びた傳說として、今日に傳へられて居るものが少くない。前にいつた玄奘三藏の「西域記」の中から、その一例を擧げて見る。

玄奘は印度から支那への歸途を中央亞細亞に取り、葱嶺を下つて今のカシュガルから于闐に出で、崑崙山脈に沿うて東する道筋、卽ち當時南道と稱した道筋によつたが、その途中于闐の東方に當る媲摩城に關した記事の中に、此の地に檀木を彫んだ佛像があつて、靈驗あらたかであるが、元來此の佛像は印度から空を凌いで媲摩城の北の曷勞落迦城に來たものである。當時その地の人々は佛法を信ぜず、從つて此の像を尊敬しなかつたが、後一人の羅漢がこれを禮拜した。國人はその樣子を見て、怪しんで國王に告げた。王は命じてその羅漢に沙土をふりかけさせた。時に或人がこれを氣の毒に思つて、密かに羅漢に食物を供した。羅漢はここを去りがけに此の人に告げて、今より七日の後に砂が降つて、城中のもの殆んど遺類なく死滅してしまふ。これは自分をけがした罰である。だから早く逃げ仕度をするがよいといつたが、果して、七日目の夜に砂が降つて城中に滿ちた。此の人は豫て作つて置いた孔道から出て、無事、媲摩城に至るを得たといふのである。

此の地方のモハメッド教徒の間にも、亦同樣の傳說がある。タリム河の注ぐ羅布泊の近傍と思はるゝ所に、カタクといふ町があつた。此の地の住民に或人が頻にモハメッド教の信仰を說きすゝめたが、一向に效果がなかつたので、其の人は遂に此の地を見捨てゝ去つた。去るに臨んで最後の說教を試みて、人々の不信を責め、神は大厄を此の町に下されると豫言した。彼に從つた從者の一人は、途中用事の爲に後に引返し、一寺の傍を過ぐる時、最後の